

これまで、『おさしづ改修版』第1巻において、「世界の道」と「神の道」を対比する用例が、明治21年4月に教会本部の設置が東京府で認可されて以後、多く見られるようになり、そこでは一貫して「神の道」を通るよう論されていることを指摘してきた。そして、今回は、本教を取り巻く史的状況と関連づけながら、第1巻全体における「道」の用例の流れを確認した。今回は、それを踏まえて、「神の道」を通るとはどういうことなのかを考察し、第1巻の「おさしづ」語句探求の結びとしたい。

対比を通して

「道を以て道を論ず」(明治22年6月10日)という言葉があるように、「おさしづ」においては、信仰者の心の置き所や進むべき方向を「道」という言葉によって論されている。それは、単に何らかの具体的な物事や行為それ自体を指し示すというよりは、むしろそれに関わる人の信仰姿勢あるいは生き方について論される言葉であると言えるだろう。「おさしづ」において「道」という言葉は、しばしば対比を用いて説かれている。その最も基本的なものが、「世界の道」と「神の道」である。この二通りの「道」による論は、教会本部の設置認可後、一貫して見られるが、それは、ほかの様々な「道」を用いた対比にも言い換えられている。「道」は幅広い意味を持つ言葉であるが、こうした対比によって、神の論す「道」の内容が理解しやすいように説かれているように思われる。

様々な対比の例があるが、それらはいずれも「世界の道」と「神の道」に対応している。たとえば、「新しい道」と「古き道」の対比は、「世界の道」と「神の道」の関係をよく表している。

をやがあるで子という。子は世界という。……古き道があるから新しい道がある。古き道はをや、新しい道は子という。さあ—だん—に新しい道を通ろうとするで、古き道が忘れる。(明治22年10月9日)

新しい道は通りよいと皆思う。なれど新しい道は通り難くい。古き道の理を思え。(明治23年9月2日)

このように、どちらかの「道」が良くて、どちらかが悪いというような二者択一的な関係ではなく、新しいと古い、さらに「をや」と「子」という関係にあるとして、「古き道」を大切にせよと説かれる。それによって「新しい道」も通れるということであろう。またその関係は「表の道」と「裏の道」という対比によっても論される。

裏の道は誠の道、……誠というは通り難くいものである。蔭の道は難しい道、表の道は通りよい。世界の道は通り、通り難くい神の道は内、表と裏との道である。内に運ぶ人が少のうてならん。(明治21年5月21日)

ここで、「世界の道」と「神の道」は表と裏であると言われるわけであるが、その裏あるいは「内」に尽くすことの重要さを特に強く説かれている。

それでは、尽くすべき「神の道」とはいかなるものか。「有る道」と「無い道」の対比では次のように言われる。

有る道は通れるであろう、無き道は心一つ理で通る。……世界の道は通りよいものであろう。無い事始め来たる処あろう。判然世界の道、無い道を付け来たる道であろう。(明

治21年5月6日)

「有る道」とは、世間ですでにある道、あるいは社会的に判然とした位置づけのある「道」のことを指している。それに対して、何もないところから始め出した今までに「無い道」があると言われる。常識的には、社会的な位置づけのある「道」は通りやすく、それのない「道」は通りにくい。しかし、「往還道」と「細い道」の対比によって、それは違うと論される。

又同じ事情を話す。幾重にも話たる。往還道は世界の道、細い道は心の道、心の道は誠、誠は天の理、天の理であたゑという。(明治23年4月6日)

「往還道」は通りやすいように思うことによって油断がでる。「細い道」は心をしっかり定めて、神に向けて通るから通れるというのである。

これまでに挙げた用例では、いずれも、通りやすい、あるいは、通りにくいということが判断の基準として言われる。一見、「世界の道」は通りやすく、「神の道」は通りにくい。しかし、「世界の道は通りよい、通りよい道は修理肥。五十年の道は通り難くい、通り難くい道は心一つで通す。」(明治21年4月28日)と言われ、通りにくい「五十年の道」すなわち「神の道」を通ることが求められている。「成る道、神の道、成らん道は世界の道。」(明治23年1月4日)と論されるように、それによって、神の望まれる世界が成り立っていくと教えられる。

「神の道」と「ひながたの道」

以上の「道」の対比を概観することによって、「神の道」とは、何もないところから始め出した「五十年の道」を指し示していることが分かる。それは、教祖が月日のやしろに定まられてから、現身をお隠しになるまでの50年を指している。それは現在、教祖の「ひながたの道」という言葉で理解されている。しかし、明らかに教祖の「ひながたの道」を指す用例のある「おさしづ」は、第1巻にはわずか3件あるだけである。そんな中で、教祖五年祭までの通り方を論されたと言われる明治22年11月7日の「おさしづ」には、教祖の「ひながたの道」の用例が最初に、しかも、何度も繰り返し出て来ており、第1巻の「おさしづ」全体の中でも特別な存在感を有している。そこでは次のように説かれている。

口に言われん、筆に書き尽せん道を通りて来た。なれど千年も二千年も通ったのやない。僅か五十年。……まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。何程急いたとて急いだとていかせんで。ひながたの道より道無いで。……三年の道通れば、不自由しようにも、難儀しようにもしられやせん。(明治22年11月7日)

この「おさしづ」において、「道」を通るということの具体的なモデルが「ひながたの道」として、最も端的に示されている。通りにくい「神の道」を通ることによって、「世界の道」も開けるということが、教祖の「ひながたの道」による論しに集約して説かれており、いわば、第1巻の「道」に関する論しのエッセンスはこの「おさしづ」にあると言うことが出来るだろう。